

『贈三位物語(つくし舟)』論：未完の翻案雅文体小説は どう書かれようとしたか

揖斐, 高

<https://doi.org/10.15017/4741936>

出版情報：雅俗. 7, pp.43-66, 2000-01-20. 雅俗の会
バージョン：
権利関係：

『贈三位物語（つくし舟）』論

— 未完の翻案雅文体小説はどう書かれようとしたか —

揖斐 高

一

村田春海没後三年の文化十一年（一八一四）二月、春海の遺稿として残されていた未完の物語が、門人高田与清の手で『竺志船物語旁註』と題され、江戸の須原屋茂兵衛、京都の勝村治右衛門、大坂の大野木市兵衛という三都の書肆から出版された。春海の忌日は二月十三日であったから、おそらく三回忌を意識しての出版だったものと思われる。¹それにふさわしく、巻頭には大田錦城の漢文序・菊池五山の漢文序・秋山光彪の和文序・高田与清の和文序と凡例が冠され、巻末には村田たせ子の和文跋・正木千幹の和文跋・大窪詩仏の題辭（七言絶句三首）が付されるという、賑々しい仕立てになっている。

出版に至った経緯については、春海没後、村田家を継い

だ養女たせ子の跋文が次のように述べている。父春海のもとには、書きさしの歌文稿などを入れていた「づし一よろひ」があった。父亡きあとその整理をしていて、「この一巻」を見つけたしたが、ちょうどその時、亡父の門人高田与清が訪ねてきた。

さるをりしも高田与清ぬしまで来まして、こは大人の御筆すさみにこそあなれ。かくさるがうがましき跡なし事も、またさるかたに御こゝろこめたまひけんものを、いかでか物の底にしもくたしはて給はん。板にゑりて人々にも見せまほしきを、さもおほさば、おのれよきにはからひなむと、せちにいはれけり。うれしとおもふものから、かゝるすさみごとをさへことごとくしげにもてなさんは、人わろくやなど、とかくやすらはれしかど……。

た世子自身には、このような「すきみごと」を世に出してよいものかどうか逡巡する気持があった。しかし、与清の熱心な勧めによって、結局この出版が実現することになったというのである。

もっとも、春海遺稿の「この一卷」に注目していたのは、与清だけではなかった。与清と同じく春海門であった清水浜臣に、「つくし舟の序」と題する文章がある。かつて丸山季夫氏によって紹介された、静嘉堂文庫蔵の『泊泊文藻第三稿』中に収められる一篇であるが、そこには次のような文言が見られる。

こゝにわが師の筆すさびにものしおかれたる大井三位の物がたりといふあり。……たゞいさゝかあかぬことは、何くれとまぎるゝことのおはして、一の巻のみにて書さしおかれたる也けり。さるを病あつしくなりおはしたるをり、おのれに言残して、いかでをりもあらば此末かきつきても見よかすと、のたまはせしかども、おのがつたなき筆にていかでかはとおもひ捨て、筆とりおこしたることもなかりき。このころ我友高田ぬし、いかでかくながらだに、板にありてとおもひたゝるること有。おのれこそしかとりまかなふべきことなるを、物うき心ぐせにおもひおこたりて今までになりぬ。そ

れいとよきこと也ともろ心にそそのかし聞えて、つひにかく板にゑらせたるになん。

この「つくし舟の序」に底流する浜臣の心理とそれに対する与清の反応を忖度しつつ、安西勝氏はこの文章を次のように的確に翻訳している。^{註3}「病床の春海から、「お前がぜひ続きを書いて見よ」と言はれたが、自信がなくて筆を取る気になれなかった。今回高田君が、たとへ半出来の作品でも何とか刊行したいと思ひ立たれた。もともとこれを世に出すことは自分こそやるべきだったのに、思ひながらも億劫がつて、今までそれなりにしておいた。だから今回高田君の企画に「それはよいことだ」と大賛成し、唆かし勧めめてつひに出版の運びに至ったのでござるよ——言葉の陰に浜臣の無念と不平がおのづからのぞく。かう言はれると与清の方も穏やかならず、「それなら貴様がやってみろ」と言ひたいところだったらう」。

この浜臣の文章が、『竺志船物語旁註』出版に際して、与清から依頼されて書いたものであることは疑いない。しかし、この浜臣序は板本に載せられることはなかった。感情的な齟齬を背景に、両者の間で先師の遺稿に対する付註と校定の方法をめぐって対立が起こったからである。その対立の要点については、与清が板本に付した「凡例」によつ

て知ることができる。すなわち、一点は安西氏も推測しているように、与清が註を本文の仮名の脇に漢字を当てる「旁註」に止めようとしたのに対し、浜臣は「標註」^{カウラガキ}をも加えるべきだと主張したらしいこと。もう一点は「ん」の表記について、与清が浜臣などの所説を否定し、自説に従って撥音便かどうかを判断し、春海の本文に手を入れて「ん」を加除したことである。

ともあれ、このような同門内部での争いを惹起しながら、この春海の遺稿は出版されるに至ったのであるが、そもそも春海がこれを著述したのはいつだったのであろうか。その点に関して、板本に付する秋山光彪の序は、次のように記している。

ひととせ、にしごりのやにつどひて、いせ物語のこうせちきよけるをりに、なにくれのふみどものおちりたるが中に、このつくし舟の名の有けるをみて、いかなるものにかとひたりしに、師の翁ほゝゑみてのたまへらく、こはかりそめの心やりになむものしたりしを、かならず人のめよろこばせむとのすきびならねば、しかこそことえりもせざりしか。さはいへ、こもまた物がたりの数にはもれじをとて、やをらとりかくさむとし給ひしを、ひたぶるにこひえて見しに、……さる

を、なからにして筆さしおかれたるこそ、あかぬわざなれ。花の山路にて日くれたらむは、翁にはいかにおぼすにかなど聞えしを思へば、十とせあまりのむかしのことになむ有ける。

この光彪の序文は文化十一年三月の日付で書かれたものである。その序文に「十とせあまりのむかしのこと」というのであるから、光彪が「つくし舟」の草稿を見たのは文化初年頃ということになる。豊前小倉藩士であった光彪が江戸の春海の織錦齋に出入りして『伊勢物語』の講説を聴いたのはいつか、そのことが判明すれば、時期はもっと明確に限定されるであろうが、今はそれを明らかにする手だてがない。しかし、おおまかにではあるが、この序文によって少なくとも文化初年頃には、すでに春海は「つくし舟」の巻の草稿を書き上げていたことが分かる。

文化元年（＝享和四年）は春海五十九歳の年である。これに先んずる寛政末年頃には、春海はすでに新古典主義的な江戸派歌文論の骨格を作り上げていた。^{注4}光彪序に引用される春海の言葉からも知られるように、この作品はかりそめに書いてみたもので、十分な推敲も経ておらず、人の目を喜ばせるようなものではないので、秘すべきだという思いが春海にはあったようだが、同時に「物がたりの数には

もれじ」という強い自負もあつたようである。春海にとつてこの作品は、晩年に至つてようやく到達した新古典主義的な江戸派歌文論を実践的に試みる、実験的な場の一つとしてあつたと言つてよいであらう。

二

早くは曲亭馬琴が「村田の翁が筑志船物語は、今古奇観第二十六なる、蔡少姐忍辱報讐拍案驚奇にも此に相似たる物語ありといふ一編を、皇国の故事に翻案して、古言もて綴れる也」(『南総里見八犬伝』第九輯下帙中巻第十九簡端贅言)と指摘したように、この作品の原話は明代の白話小説「蔡少姐忍辱報仇」(『今古奇観』第二十六回)であつた。注ちなみに『今古奇観』はいわゆる三言二拍から四十話を抜き出した選本であるから、もとをたどれば、『醒世恒言』第三十六卷「蔡瑞虹忍辱報仇」が原話といふことになる。しかし、春海が直接に拠つたのが『今古奇観』であつたか『醒世恒言』であつたかは、今のところ確認できない。とりあえず原拠の作品名は「蔡瑞虹忍辱報仇」(『醒世恒言』第三十六卷)ということにして、まずは論を進めてゆくためにその梗概を示すことにする。

明の宣徳年間、淮安府に蔡武という武官がいた。家は豊かだったが、酒が大好きで正体を無くすことも多く、そのために官を罷めていた。人々からは蔡酒鬼と呼ばれ、妻の田氏もまた酒好きであつた。夫婦の間には十五歳になる美しい娘瑞虹と幼い二人の男の子があつた。時の兵部尚書趙貴は苦学時代に蔡武の父に恩顧を受けたことを忘れず、恩返しのために不遇の蔡武を湖広の遊撃將軍に推薦した。聡明な娘瑞虹は、父が酒のために過失を犯すことを危惧して任官に反対するが、父母はその諫めを用いず、一家を挙げて揚州から船で赴任することになった。その船には船頭の陳小四ほか七人の水夫が乗っていたが、いずれも凶悪な海賊たちであつた。彼らは蔡一家の財物と瑞虹の美しさに目がくらみ、ひそかに襲撃の時を窺っていたが、黃州を船出して蔡夫妻が大酔したのを機に、一行を皆殺しにして財物を略奪し、首領の陳小四は瑞虹を陵辱した。瑞虹は殺された父母の仇を討つために陵辱を耐え忍ぶが、後難をおそれた陳小四はついに瑞虹の首を絞めて、船から逃亡する。

絞め殺されたかと思われた瑞虹は、しばらくすると夢から醒めたように蘇生した。海上を漂っていた瑞虹を乗せた船は、運良く漢陽府の卞福という豪商の船に衝突し、

瑞虹は救助された。卞福は瑞虹の身の上に起きた出来事を尋ね、仇を討つための協力は惜しまないから、取りあえずは自分と夫婦になってはどうかと説いた。瑞虹は我が身を再び汚すことを悲しむが、報仇のためにと思い定め、卞福に従って漢陽に同行した。ところが漢陽には卞福の嫉妬深い妻が待っており、瑞虹はこの嫉妬深い卞福の妻に欺かれて、人買船に売り払われてしまう。

瑞虹は武昌の娼家に売られるが、なかなか客を取ろうとしない。しかし、報仇の便宜を得るため、武昌の太守の親戚というふれ込みの胡悦という男に身請けされることになる。胡悦は官職を得るため瑞虹を伴って都に上るが、金に窮してしまふ。そこで胡悦は悪者たちと謀って瑞虹を妹と称し、朱源という人物を相手に美人局を計画し、瑞虹を朱源のもとに送り込む。朱源を温厚で信頼に足る人物と見た瑞虹は、一身を委ねて美人局の陰謀をうち明け、朱源ともどもその難から逃れる。

その後、瑞虹は朱源の子を産み、朱源は進士の試験に合格して武昌県の知事に任ぜられる。任地への船旅の途中、瑞虹は呉金という名の船頭が実は仇の陳小四であることを気づき、朱源に相談する。朱源は沈着に事に処し、陳小四のもとにやって来た他の二人の仇ともども悪党た

ちを捕縛し、揚州の太守に引き渡す。彼らは拷問されて旧悪を白状し、他の土地に逃げていた残りの仇たちも逮捕されて、仇はすべて処刑されることになる。

報仇の完了した瑞虹は、父蔡武が婢に生ませた忘れ形見を探し出して、蔡家の後を継がせるよう朱源に依頼する。朱源は瑞虹の郷里に赴いて依頼通りにことを運び、瑞虹の父母の墓前に仇たちの首を供えて、報仇の報告祭を行う。その報せを武昌で受けた瑞虹は、みずから剃刀で喉をついて死ぬ。夫朱源に宛てた遺書には、女として節操を汚してまでも生き延びてきたのは、父母の仇を討つためであったが、あなたのお陰によってその報仇が完了したいま、もはや生き恥は晒したくないと記されていた。朱源の悲しみは大きかったが、任期を終えて都に帰った朱源はさらに出世し、瑞虹の生んだ息子朱懋も若くして進士に及第した。朱懋は母瑞虹の一生を書き記して旌表を賜るよう奏上したところ、帝はそれを許可し、とくに貞節と孝行を表彰する坊が建てられた。

以上が原話「蔡瑞虹忍辱報仇」の梗概であるが、この原話の土地を日本に、時代を平安時代に移して翻案したものが『竺志船物語』である。その梗概は次の通りである。

年はまだ三十前だが、兵衛の督と宰相を兼ねる大井の三位という人がいた。学問があつて何事にもすぐれ世の尊敬を集めていたが、ただ酒癖が悪く、酒鬼まよおとあだ名されていた。大井三位はある時、殿上の淵酔で泥酔して乱暴を働くという不祥事を起こし、帝の怒りにふれて官職を奪われ、大井の山荘に引き籠つてしまふ。夫と同じく酒好きの北の方との間には、幼い男児と十五歳になる美しい姫君があつた。姫君は美しいばかりでなく聡明な生まれつきで、父の深酒を憂えて諫言するが、父母ともに耳を傾けようとはしなかつた。時の権力者であつた右大臣は、若い頃大井三位とは親しい学友であつたので、埋もれている大井三位を惜しみ、大宰府の帥に推薦した。姫君は不安を感じて、辞退するよう父に忠告するが、忠告は容れられず、結局大井三位一家は赴任することになる。都を離れる名残に、一家は嵯峨野に秋の花見をし、山崎の港から船出をして大宰府へと向かう。難波の舟人たちの送りの船のほか、大宰府からは筑紫の舟人たちの迎への船が派遣され、盛大な一行となるが、船出の時期をめぐつて難波と筑紫の舟人の間で争いが起き、大井三位一家は少数の護衛とともに遅れて筑紫の船で大宰府へ向かうことになる。船路の途中、須磨の浜に上陸して月

見の宴を催した大井三位は、気が緩んで泥酔してしまふ。筑紫の舟人たちはもと藤原純友の乱の残党たちで、舟人として世を忍んでいたが、船頭の千引は姫君の美貌と大井三位の泥酔を見て、海賊となつて姫君を我がものとし、財物を略奪しようという悪心を起こし、仲間と語らう。機会を狙っていた彼らは牛窓の港で、一行を虐殺し、財物を分け取りにする。父母や弟を目の前で殺された姫君は、報仇のため海賊の首領千引の陵辱に身を任せて耐えるが、後難を恐れた千引は、姫君の首を絞め、櫃の底に残された帯だけを懐に入れて、姫君の乗つた船を見捨てて逃亡する。

『竺志船物語』は、原話の梗概でいうとその第一段落、すなわち海賊の首領陳小四が瑞虹の首を絞めて船から逃亡するところまでの翻案ということになる。この部分は原話全体の分量の二十七パーセントほどに当たっている。ごく大まかに言えば、『竺志船物語』は原話「蔡瑞虹忍辱報仇」の四分の一強に当たる部分の翻案であり、その翻案の末尾には「かくてこのうきふねのゆくへいかゞありけん。そはつぎの巻にこそ」と記されてはいるものの、原話の残り四分の三弱の部分は着手されないまま放棄されてしまつたと

いうことになる。

原話「蔡瑞虹忍辱報仇」と翻案『竺志船物語』との個別の対応関係はおおよそ次のようになる。まず主な人物について、

蔡武―大井の三位 田氏―北の方 十五歳の娘瑞

虹―十五歳の姫君 長男の蔡韜と次男の蔡略―「い

と稚なる」男児ひとり 兵部尚書趙貴―右大臣

陳小四―千引 水夫七人（白満・李蠟子・沈鉄髭・

秦小元・何蛮二・余蛤蚘・凌歪嘴）―舟人五人

（鼬鼠鷹・酸漿目・烏脛・鳩胸・鉾頭）

という対応関係になるが、大井の三位と北の方は原話と同じように酒好きで、大井の三位も「酒鬼」と呼ばれ、過ぎし頃の「殿上の淵酔」で酒のため不祥事を起こし、大井の山荘に逼塞している。しかし、原話においては兵部尚書趙貴は若い頃蔡武の父に恩を受け、その恩返しのため蔡武を湖広の遊撃將軍に推薦するという設定になっているが、『竺志船物語』においては右大臣と大井の三位とはかつての学友同士で、右大臣は友情から不遇の大井の三位を大宰府の帥という重職に推薦するというように変えてある。

また原話の瑞虹と翻案の姫君とは、ともに美しく思慮深い女性で、「酒鬼」である父の赴任に不安を感じ反対する

が、その諫めは聞き届けられず、ともに一家を挙げて任地への船旅に立つことになる。そして、揚州の港から船出し、黄州で惨劇に遭うというのが原話の運びであるが、『竺志船物語』ではいかにも平安朝の物語にふさわしく、淀川の山崎から船出し、大宰府に向かう船旅の途中、瀬戸内の牛窓の港で惨劇が起きるといように設定されている。

後に問題にするように、『竺志船物語』には原話にない幾つかの場面が新たに設けられているほか、右に指摘した点を含めて細かな変更も少なからずあり、書かれなかった残り四分の三弱の部分にどのような展開が考えられていたかは分からないといえれば分からないのだが、現存する四分の一強の部分を読み比べた限りでは、大筋としては原話「蔡瑞虹忍辱報仇」の筋をなぞる形で話の展開は想定されていたと考えるとよいであろう。

三

ところで、板本『竺志船物語旁註』と同一の本文内容をもつ、『贈三位物語』と題される春海の自筆稿本一冊が、天理図書館の春海文庫に蔵されている。春海文庫に収められているものは、村田たせ子跋のいう春海の歌文遺稿を収めた「づし一よろひ」の中味と、それ以外の春海旧蔵書類

を合わせたものと推定されるが、そうした伝来の文庫中の春海自筆稿本であるということは、文化初年頃に秋山光彪が織錦斎で目にし、ついで清水浜臣が重病の床にあった春海に示され、さらに春海没後に高田与清が村田たせ子から借り出して板本『竺志船物語旁註』の底本にした一本というのは、おそらくこの自筆稿本『贈三位物語』そのものか、あるいはこれに前後する時期の稿本ではなかったかという推測を可能にしよう。しかし、この作品に対する生前の春海の様子からして、時期を異にする何種類もの稿本があったとは考えにくく、彼ら三人の門人たちが目にした春海の自筆稿本とは、まず、現在天理図書館春海文庫に所蔵されるこの『贈三位物語』であったと考えてよいのではあるまいか。

この自筆稿本『贈三位物語』には、ところどころ春海の筆跡で推敲のあとが見られるが、自筆稿本『贈三位物語』における推敲後の形が、板本『竺志船物語旁註』の本文になっていることも、天理図書館蔵のこの自筆稿本『贈三位物語』が、板本『竺志船物語旁註』の底本であったことを示唆しているように思われる。

高田与清が板本『竺志船物語旁註』を出版するに際して底本に手を加えたことは、先にも述べたように与清自身

「凡例」に明らかにするところであった。繰り返しになるが、その一点は、読みやすく、文意を取りやすくするため、仮名書き部分の右横に「旁註」として漢字を振ったことである。もう一点は、与清が自説に従って撥音便かどうかを判断し、底本に手を入れて「ん」を加除したことである。後の点について、与清は「凡例」において、次のように記している。

書中「ん」とはぬる字をくはへもし、刪もせしは、世人のいぶかしみおもふふしぐあるべし。たとへば「あん也」「よかん也」といふ語は「ある也」「よかる也」の音便なれば、「る」もじにかへてかならず「ん」もじを添たり。「やごとなし」といふ語は無「止事」とも、また無「惱」ともいへる旧説うけがたければ、余が考もて無「上事」の義とさだめつ。さては「いやごとなし」の略なれば、「ん」もじえうなきをもてはぶきたり。清水氏は不「得」已の義也ともいひたれどしばらくくまろが説もて書たり。

しかし、実は与清の校定作業はこの二点だけに限定されるわけではなかった。「旁註」という形を取らずに、本文において、自筆稿本では仮名表記になっているところを板本では漢字表記に改めてある箇所もかなりあるが、今はそ

れを問題にしないとしても、それ以外にも与清の判断によって校定されたと思われる箇所は少なからずあるのである。その具体例を物語の初めの部分から数カ所示しておくことにしよう。板本『竺志船物語旁註』での形を基準に掲げ、自筆稿本『贈三位物語』と相違する箇所を傍線を引き、傍線の右横に()を付して自筆稿本の形を掲げることにする。

○一丁ウ「わがあやまち(おもひたらで)ともおもほさで、あらためたまふべき御心(たまはんの)もなきぞうたてあるや」

○三丁ウ「よろづ(まとの)にさどうおはして、はかなくしいでたまふことも、すべて心(心しらび)しらひ人(まとの)にはことなり」

○四丁オ「かくまでこのませ給ふものを、ひたぶるにやめたまへ(とどめたまはんとには)には侍らねど」

○四丁ウ「此友だになからましかば、御心ゆくかたもあらで、いとどさう(さうぐしからん)くしからましなど」

○八丁ウ「御身の世に出給はんは、たれも(たれくも)ねがはしきすぢにて」

○十丁オ「今よりかたく此すきみとどめたまはどこそあらめ、もしとどめたまはざらんには、此つかさ(じゝ給はんこそやすからめ)じし給ふぞうしろやすきわざに侍るべき」

○十丁オ「父君きゝたまひて、いとかしこうもの給ひけり(のたまひけり)な」

清濁の判断のほか、語法に関するものが多いことがわかる。与清の校定によって語法的に整備され、文意の通りがよくなった箇所もあり、与清の労は労として認めるべきであらうが、あえて改変するまでもないような改変を加えた、

与清の勇み足と言えなくはない箇所もある。したがって、春海の作品としてこの物語を論じるには、自筆稿本が伝存している以上、やはり基本的には自筆稿本の方に拠るべきであろう。本稿もこれ以後の論述は天理図書館蔵の自筆稿本『贈三位物語』に拠って進め、板本『竺志船物語旁註』の本文は二次的な本文として参照するにとどめたいと思う。

ところで、そのことも関連して、考察すべき大きな問題が一つ残されている。それは、この未完の物語の題名についてである。与清がこの作品を『竺志船物語旁註』と題して出版したのは、現存する冒頭巻の巻名が「つくし舟」となっているからであるが、書かれなかつた部分をも含めてこの物語全体の総名は「大井三位物語」であると、与清は板本の「凡例」の中で述べている。

此書はもと大井三位物語と名づけられしにて、つくし舟といへるは一の巻のみの名なれど、はつかにひと巻を書きして捨られしものなれば、やがてその巻の名もてうはぶみにはとりなせし也。

同じように、清水浜臣も「つくし舟の序」の中で、この物語の総名については「こゝにわが師の筆すさびにものしおかれたる大井の三位の物がたりといふあり」と記している。ところが出版に際して与清が底本に用いたと考えられ

る天理図書館蔵の春海自筆稿本のどこにも「大井三位物語」という題名は見られないのである。

春海自筆の稿本では、後補表紙の左肩に題簽が貼られ、それに「贈三位物語村田春海自筆」と外題が墨書されているほか、原表紙に当たる扉紙の中央に「贈三位物語 一」と打ち付け書きの扉題があり、さらに本文冒頭に「贈三位物語 一／つくし舟」と二行に内題が墨書されているのみで、どこにも「大井三位物語」という文字はない。外題および扉題は同一の筆跡であるが、それらは内題の春海の筆跡とは異なっている。外題および扉題の筆跡は森銃三氏のものとして間違いのない。この自筆稿本を含めて春海文庫は一括して弘文荘を経て天理図書館に入っており、その際に仮目録を作成するなどの整理に携わったのは森銃三氏であった。外題および扉題は、その整理の際に春海自筆の内題にしたがって森銃三氏が染筆したものと考えてよいであろう。それでは、自筆稿本の内題にもともと「贈三位物語」と記されていたにもかかわらず、なぜ板本出版に際して「大井三位物語」とされるようなことが起きたのか。可能性の一つとしてあり得るのは、現在天理図書館に蔵されている自筆稿本とは別の、「大井三位物語」と題された稿本があり、浜臣が目にしたのもそれであり、また与清が出版に際

して底本にしたのもそちらの稿本だったということであろうが、先ほども述べたように別種の稿本があったという可能性は至って少ないように思われる。

しかも、よく考えてみると、もしこの物語の総名に「大井三位物語」という題名が与えられていたとすると、それははなはだ不適切な命名であると言わざるをえないのである。なぜなら、この物語が原話の筋立てに忠実な翻案であるとするれば（おそらくそうであろう）ということはずでに指摘した）、この物語の主人公は大井の三位ではなく、その娘の姫君だからである。確かに翻案された全体の四分の一強にあたる巻一「つくし舟」に限っていえば、大井の三位は主人公に相当する大きな役割を果たしている。しかし、大井の三位は巻一の終わりの部分で海賊に殺されてしまい、おそらくこれ以後、翻案されなかった残り四分の三弱の部分に大井の三位が登場する場面はない。あくまでも主人公は大井の三位の姫君であり、物語のテーマは姫君による報仇であったはずである。そういう構想の物語に、作者春海自身が主人公が大井の三位であるかのごとき「大井三位物語」という題名をつけるはずはない。「贈三位物語」という題名をつけた自筆稿本とは別に、春海自身が「大井三位物語」という題名をつけた稿本が別にあつたとは考えにく

いのである。

それでは、春海のつけた「贈三位物語」という題名は何を意味しているか。これは個別の巻名ではなく、この物語の総名としてつけた題名であるから、一般的には、物語全体を覆う言葉か、あるいは物語の最終的な結末を予測させるような言葉が、題名として選ばれるはずである。以下は書かれなかった部分についての論であるから、あくまでも推測の域を出ないが、春海はこの物語を書き始めた時にはすでに最終的な結末の構想を決めており、その構想を踏まえて「贈三位物語」という題名がつけられたのではあるまいかと思う。

梗概で示したように、原話「蔡瑞虹忍辱報仇」では主人公瑞虹はめでたく報仇を果たし、遺子の奏上によって、帝から坊を建てて旌表を掲げることが許されるというのがその結末であった。筋立てに関しては忠実な翻案だと思われるこの物語でも、おそらく姫君が忍辱の末に報仇を果たし、みずから死を選ぶことで結末を迎えるという構想であったと考えてよいであろう。しかし、原話に見られる旌表については、春海は別の形を考えていたのではあるまいか。なぜなら、平安時代の日本に旌表という風俗は一般的でなく、平安朝の物語として翻案されるこの物語に、中国的な旌表

という顕彰の方法はそぐわないからである。

春海が旌表に替わるものとしてこの物語の結末に予定していたのは、死を以て貞節と孝行を全うした姫君への「贈位」だったのではあるまいか。贈位とは、「贈位贈官と云は、死したる人に位を被_レ仰付」を贈位と云、官を被_レ仰付」を贈官と云。贈はをくるとよむ字也。死人に官位を送り給也」(『貞丈雜記』卷四・官位)というもので、『新儀式』卷五「薨卒人加_二諡号_一并贈_二官位_一事」に、「太政大臣薨、有_二詔命_一、加_二諡号_一、贈_二正一位_一、給_二食封国_一。亦大臣贈_二位階_一、或贈_二太政大臣職_一。又納言已下有功之者、并僧綱、後宮女官、天皇外戚、男女間蒙_二贈位之恩_一」と見えるように、男女の別なく行われた死者への顕彰の制度であった。

忍辱のあげく父母の報仇を果たした姫君はみずから死を選ぶが、朝廷はその貞節と孝行を嘉して、原話のような旌表ではなく、亡父大井の三位の官位であった「三位」を姫君に贈位してこの物語は閉じられる、というように作者春海は予定していた。そうであればこそ、この物語は春海によって「贈三位物語」と命名されたように思われるのである。

内題部分に「贈三位物語」と明記されている春海の自筆

稿本を板本出版の底本にした与清が、この題名を無視して「凡例」に「大井三位物語」と記したのは、おそらく「贈三位物語」という題名の意味するところをつかみかねたからであろう。与清は、物語冒頭に「氏は藤原にて、大井の三位といふ人いまそがりけり」という一文があるのを幸い、分かりやすい「大井三位物語」という題名に安易に改変してしまったのではないだろうか。春海の自筆草稿を目にしたことがあるはずの浜臣の序文までもがこの物語を「大井三位物語」と称しているのは、浜臣が自筆草稿を目にしたのがかなり昔のことであったため、その点に関する記憶が定かでなく、与清の依頼によって序文を書いた時、浜臣は与清からこの物語の題名を「大井三位物語」であると聞かされていたからではないかと思われる。

四

内容的にはどちらであつても大差ないが、この物語の原話が直接的には『醒世恒言』第三十六卷「蔡瑞虹忍辱報仇」なのか、『今古奇観』第二十六回「蔡少姐忍辱報仇」なのか明らかでないことはすでに述べた。しかし、ともに四十話を収める『醒世恒言』や『今古奇観』の中から、村田春海はなぜこの一話を原話として選んだのであろうか。十

五歳的美貌の女主人公の陵辱という刺激的な場面を含めて、波瀾万丈の話の展開に惹かれたことは間違いないであろう。しかし、春海にとつては、女主人公の父蔡武が「酒鬼」として描かれているところにもまた大いに惹かれるものがあつたのではないか。

春海が三十代半ばの安永末年に、吉原での遊蕩によつて家業の干鯛問屋を破産させたことはよく知られているが、その後春海は急激な転変を経た自分の半生を振り返つて、七言二十二句からなる古詩を詠んだことがあつた。その古詩の詩題は「酔郷主人歌」（註）。みずからを「酔郷主人」と称し、

主人驕惰性且僻

主人驕惰にして性且つ僻

治産何問計然策

治産何ぞ問はん 計然の策

読書学剣両不成

読書学剣 両つながら成らず

縦酒沈湎惟自適

酒を縦にして沈湎し 惟だ自適す

日入酔郷営糟丘

日に酔郷に入り糟丘を営み

随意交遊無所択

随意に交遊して択ぶ所無し

と詠じている。酒もその一因となつて破産した春海にとつて、原話の「蔡酒鬼」は遠い人間ではなかつたはずであり、翻案の「大井の三位」を描くにも容易に感情移入が可能だつたものと思われる。

蔡酒鬼の妻が酒好きであつたように、大井の三位の北方も夫同様「おなじさまに酒をしもふかくこのみたまひ」ともに酔いつぶれるような女性として登場する。春海の妻おすがはもと吉原丁子屋の遊女丁山であつた。安永末年の春海の破産には、丁山の身請けも関連していると推測されるが、かつての職業柄から春海の妻おすがもまた「酒をしもふかくこの」む女性だつたであろう。

この物語において北の方は、姫君が父大井の三位の深酒を諫言するのを、「かたはらよりいひけち」たり、姫君の心配を後目に大井の三位の大宰の帥赴任を單純に喜んだり、さらにはいざ惨劇の場面になると、「こゑわなゝかし給ひて、わがもたる宝は皆御心にまかすべし。いのちひとつは我に得させ給へ。あが仏、あがほとけとの給へば」と、なりふり構わず海賊に命乞いをするというように、思慮が足りないやや浅薄な人物として描かれているが、このような場面は原話にはない（原話で命乞いをするのは召使である）。春海の知人たちから「誠に女郎上り故よからぬ人物也き」（黒川隆盛『松の下草』）とか、「いとくねくしき尼」（高田与清『擁書楼日記』）と評されているように、遊女上がりのためか、春海の妻おすがには世間知らずからくる愚かな面もあつたようで、そうした点もあるいは物語中

の北の方の描写に投影されているのかもしれない。ともあれ、この原話を選ばれ、翻案の人物造型がなされるに際しては、やはり少なからず作者春海の心情や観察が作用しているのではないかと、このことを指摘しておきたい。

さて、作中人物の造型という点では、主人公の姫君についても言及しておくべきことがある。原話「蔡瑞虹忍辱報仇」の主人公蔡瑞虹は、「那女子生得十二分顔色、善能描龍画鳳、刺繡拈花。不独女工伶俐、且有智識才能、家中大小事体、到是他掌管」と描かれている。こうした原話の主人公の造型を踏まえて、『贈三位物語』で姫君は、「此姫君かたち世にすぐれてあかぬ所なく、よろづにさとうおはして、はかなくしいでたまふことも、すべて心しらび人になることなり。又常の御心おきて、まめやかにおしたちたる所ある御本じやうなれど、うはべはたゞ女しくおほとかにのみもてつけたまひて、さしすぐいたるかたなどはつゆ見えたまはず」と紹介されて登場する。

美貌で頭が良く、思慮深く、女性としての嗜みにも欠けるところが無いという点では、両者はまったく一致している。しかし、蔡瑞虹の方には見られないが、姫君の方に付け加えられている点もある。姫君は、表面的には女らしくおっとりしていて、出過ぎたようなところは見られない

が、御本性には「まめやかにおしたちたる（着実で意志の堅い）所がある」という記述である。今後起きる悲惨な出来事乗り越え、波瀾万丈の運命に弄ばれながら、報仇の初志を実現してゆくためには、こうした「まめやかにおしたちたる」性格が姫君には備わっているべきであると、作者春海は考えたのである。原話にはないこのような記述をここにすべり込ませることによって、春海は物語の展開と主人公の性格とをいっそう緊密に関連づけようとしたのである。用意周到な配慮というべきであろう。

人物設定に関して、指摘しておきたい点がもうひとつある。加害者となる海賊たちの描き方である。原話の船頭陳小四と七人の水夫たちは、初めから船客の命を奪い、財物略奪の機会を狙う海賊として描かれている。しかし、『贈三位物語』ではそうではない。船頭千引と五人の舟人たちは、大宰の帥として赴任する大井の三位を迎えるため、官から派遣された筑紫船の乗組員たちであった。彼らは最初から海賊であったわけではない。彼らが海賊に変貌するのは、途中上陸して宴を張った須磨の海岸で、いかにも平安朝の物語らしく、船頭千引が姫君を垣間見て心を奪われてしまったからであり、また彼らがもともと西国に反乱を起こした藤原純友の乱の残党で、舟人として世を忍ぶ不遇な

生活をしていたからであった。筑紫の舟人と難波の舟人との船出の時期をめぐる争いの結果、帥一行の警備はすでに手薄になっており、帥自身も正体無く泥酔しがちなことを知った彼らは、姫君の美貌に心を奪われた船頭千引を首領として、やがて海賊に変貌し、皆殺しの惨劇に及ぶのである。

原話では、初めから海賊として登場した者たちが残酷な海賊行為を働くという単純な設定であるのに対し、『贈三位物語』では、官の舟人たちが姫君の美貌と大井の三位の泥酔をきっかけに、潜在させていた不遇感を爆発させて海賊に変貌するというように、複雑な状況設定に変えられている。とくに、純友の乱という歴史的な事件を背景に取り込むことによって物語に奥行きが付与された点と、官の舟人が海賊に変貌して残酷行為に及ぶというスリリングな展開に変えた点とは、作者春海の見事な手際として高く評価されるべきであろうと思う。

五

春海はこの翻案の物語を雅文体（古典的な和文体）を用いて書こうとした。そこに江戸派の新古典主義的な歌文論を実験的に試みようとする春海の意図があったことは第一節にも記したが、その結果、この物語には古典を典拠とす

る表現が多く見られることになった。全体にわたって散在するその一つ一つをここに挙げることはできないが、とくに注目すべき二箇所をまず取り上げてみよう。

その一つめは、大伴旅人の人となりを慕っていた大井の三位が、旅人の「酒を讀むる歌」を踏まえて作中で詠む五十一句からなる長歌一首である。もともとは原話に蔡武が口ずさむ五言十八句の長詩があることの翻案であるが、旅人は大宰の帥に任ぜられていたことがあり、そもそも旅人の「酒を讀むる歌」は、『万葉集』卷三に「大宰帥大伴卿讀酒歌十三首」と題して収められるものであるから、やがて大宰の帥として赴任することになる大井の三位の長歌の典拠としては、よく嵌っているといえる。もっとも旅人の作は短歌十三首の連作であって、長歌ではない。春海が旅人の歌の表現を借り用いながら大井の三位の歌を長歌にしたのは、やはり原作が長詩であったためであろうが、しかし、そのためばかりでもない。

春海が中心となって形成した江戸派歌文論の主張の一つに、長歌復興の論がある。この論は春海の随筆『歌がたり』にまともに見られる。その中で春海は、短歌は古くよりすぐれた歌人たちによって詠み尽くされており、もはや新しい表現の可能性に乏しいが、長歌については、「世々に

歌数も少ければ、古の人の思ひのこせる巧も、いひもらせるふしも多かるべし。かく降りたる世にして、めづらかに新なる事を一ふしよみいで、古人にもはづまじきわざをなしてむものは、たゞ長歌なり」として、大きな可能性が残されていると述べている。作中の大井の三位の「酒を讃むる」長歌一首には、こうした長歌復興論の実践としての意味合いもあったと考えてよいであろう。

作中の長歌は、旅人の「讃酒歌」を典拠として用いるだけでなく、構成的には、春海の師であった賀茂真淵の長歌「うま酒の歌」（『賀茂翁歌集』巻二）を明らかに意識している。真淵の「うま酒の歌」は、「うまらにを やらふるかねや 一つき二つき ゑらゑらに 掌底たなせこうちあぐるかねや 三つき四つき ……」というように、酒杯を重ねるごとに陶然となってゆくさまを詠んだ作であるが、春海のこの長歌も、「うきふしの しげき時すら 一つきを 手にとりもてば おのづから 心ゆたけし またさらに 二つき三つきよどみなく のみての後は むすぼゆる おもひもとけぬ ……」というように、杯を重ねるに従って意識が解き放たれてゆく酒の徳を詠むという展開になっているからである。ちなみに、自筆稿本においてもとも推敲の跡の著しいのは、この長歌の部分であった。春海にとって

この長歌をどう詠むかは、作品中の大きな課題だったと言っ
て間違いない。

二つめは、淀川の上崎から船出する大井の三位一行を（おそらくこれは『土左日記』を意識した設定であろうが）、右大臣が御使を派遣して見送らせる場面である。右大臣は、航海の安全を祈って海神に供えるための銀の船を御使に託し、次のような歌を添えて、大井の三位に贈る。

はりまがた嶋こぎはなれゆかん日は八重の汐路に
たむけよくせよ

とまる心もとあり。

そして、これを受けた大井の三位は、次のような歌を返す。
つくしの海ふなはてしなば先まきつげんやへの汐路は
はるかなりとも

をしきものこそとて、猶ゆく末のことどもたのみ聞え
給ふことこまやかなり。

それぞれの歌は、場面に合わせて春海が新たに詠作した
ものと思われるが、歌の後に付されている、「とまる心も」と「をしきものこそ」という言葉には典拠がある。その典拠とは、ともに『後撰集』巻十九離別・羈旅の歌で、前者は陸奥へ赴く人を見送る「よみ人しらず」の「別わかゆく道の雲うゐになりゆけばとまる心もそらにこそなれ」、後者は筑

紫へまかる小野好古が「きよい子の命婦」に送った「年をへてあひ見る人の別には惜しき物こそ命なりけれ」という歌である。

よみ人しらずの歌は、ここで別れてあなたが遠くに隔たつてしまえば都に留まる私の心もうつろになつてしまふでしょうという意の送別の歌であり、小野好古の歌は、何年か経つて旅から帰つてまた会うことになるであらう人との別れで最も惜しまれるのは命というものですという意の留別の歌である。春海はそれぞれ自作した物語中の歌の後に、『後撰集』のこれらの歌の一句を付け加えることによつて、右大臣の送別の情と大井の三位の留別の情という、親友同士の別れの衷情をより印象的に表現しようとしたのである。なかなか手の込んだ典拠の用い方である。

しかも、それが『後撰集』の歌であるというところにも、作者春海の配慮があつた。海賊に変貌して惨劇に及ぶ筑紫の舟人たちが、純友の乱の残党として設定されていること、この物語に歴史的な奥行きが付与されたということは、前節で指摘した。純友の乱が起きたのは天慶二年（九三九）、鎮定されたのは二年後の天慶四年である。つまりこの物語は、純友の乱鎮定後間もない時代を背景としていることになるが、二番目の勅撰集として『後撰集』の撰進が始めら

れたのは天曆五年（九五二）年であり、この物語が背景とする時代にもっとも近接する勅撰集中の歌を選んで、春海は典拠に用いたことになるのである。そしてさらには、朝廷より追捕使として任命され、純友の乱を鎮定したのは、実は筑紫へ向けて都を発つときに「惜しき物こそ命なりけれ」と詠んだ、『後撰集』中のこの歌の作者小野好古であつた。作者春海の配慮には緻密なものがあると言ふべきであらう。

さて、筋立てにおいて、この『贈三位物語』は原話にかなり忠実な翻案であらうとしたのではないかということは、しばしば述べてきた。しかし、原話には相当する場面がないにもかかわらず、翻案では物語の展開上重要な意味を持つ二つの場面が新たに設けられていることも、見過ごしてはならない。そして、そうした場面では、原話との対応関係がないだけに、作者春海の直接的な体験が生かされていたり、平安朝の古典が典拠として大きく用いられていたりする。『贈三位物語』で新たに設けられた場面とは、一つは都を旅立つに際して大井の三位一家が嵯峨野に秋の花見に出かける場面、もう一つは船旅の途中、須磨の海岸に上陸して月見の酒宴を催す場面である。

まず第一の場面では、大井の三位一家はしばらく都を離

れる思い出に嵯峨野の秋を尋ね、秋の花見をしたのち、法輪寺に宿る。なぜ大井の三位一家は嵯峨野に秋の花見をし、法輪寺に宿るのか。嵯峨野のほかにも京都郊外に秋の花見のできる場所は少なくない。また、嵯峨野には法輪寺のほかにも多くの寺がある。天明七年（一七八七）秋、春海は京都に遊び、そのまま越年して天明八年春まで上方に滞在したことがあった。その時、法輪寺の住職の誘いで秋の嵯峨野・嵐山に遊び、法輪寺に宿ったことが、春海の紀行文『秋の山ふみ』^{註10}によって知られるのである。春海はみずからこの体験を踏まえて、この場面を設定したのであった。

大井の三位一家は嵯峨野の秋を逍遙し、それぞれ秋の花を詠み込んだ歌を作る。大井の三位は、

またも来む秋はちぎらじことしだにたもとにははせ萩
が花つま

北の方は、

初をばななにまねくらん秋のゝにとまりはつべきわが
身ならめや

姫君は、

秋の野のちくさがなかのをみなへしやさしやいかでひ
とりたつらん

という歌である。

これらの歌もまた場面に合わせて、作者春海が自作したものであるが、大井の三位と北の方の歌にはそれぞれ「またも来む秋はちぎらじ」や「とまりはつべきわが身ならめや」と詠まれており、未来の不吉な運命を予言する表現になっている。さらに姫君の歌にも「やさしやいかでひとりたつらん」とあって、一人取り残されることになる姫君の不幸が詠み込まれているのである。いずれも秋の野の花の風情を詠む歌の如くでありながら、同時に登場人物たちの今後の不幸な運命を暗示する歌としても解釈できるような作者は工夫している。いわゆる稗史七法則の「伏線」にあたる表現法になっていると云ってよからう。

そして、伏線はこの三首の歌に止まらない。その夜法輪寺に宿った大井の三位は、夢に現れた今は亡き父大納言が、筆を手にして御堂の柱に次のような歌を書くのを見る。

あら汐にこゝろゆるすな大舟はまかぢありともなにした
のむべき

この歌は前の三首よりもさらに直接的に、将来に起こる惨劇を予告する歌であるが、伏線としてはいかにもだめ押し
の感があり、あるいはやや執拗に過ぎる趣向と言うべきかもしれない。ともあれ、原作にはないこのような場面を新たに設け、春海は得意の詠歌の才を発揮して、物語の今後

の展開を讀者に予告しようと試みたのである。

次に問題にするのは、この嵯峨野の場面と並んで新たに設けられたもう一つの場面、すなわち須磨の海辺で一行が月見の酒宴を催す場面である。かつて在原行平が勅勘を受けて謫され、海女の姉妹松風・村雨と馴染んだという謡曲で名高い伝説の地であり、『源氏物語』では光源氏が流罪の危険を避けるためみづから都を退去して侘住みをした須磨の地である。和文作者として筆の冴えをみせるには恰好の舞台であり、すぐ近くを通りながらこの地を無視して物語を進めるといふわけにもゆかなかつたのであろう。原話に相当する場面はないが、春海はわざわざこの場面を設定し、須磨の海辺での月見の酒宴という風雅な情景を、故事や古典作品の表現を踏まえながら、たとえば次のように流麗に描き出している。

月は夜ごとにすみまされば、浜べにいであ、よものけしき見やり給ふ。空は塵ばかりの雲もあねば、あはち島はたゞ手にとるやうにて、海のおもては、千さとの波はるかに晴て、こがねのふすましましきたらんやうなり。北の方の御車は小松どもおほかるなかにたてゝ、下すだれほのかにかゝり給ひ、君は磯間に御馬とどめ給ひて、ぜんじやう引わたして、かりのおまししつらひて

居給ふ。守まうけの物どもになひいでゝ、へいじとりながら、ふりにし事どもかたりいづ。むかし行平の中納言の、もしほたれつゝとわび給ひけるすみかは、かの関のあなたにて、こゝよりはたゞはひわたる斗ちかきがほどなり。

傍線を引いた箇所は、ほぼ同文が『源氏物語』須磨巻に見られる。しかし、この場面はただ古典を踏まえて風雅な情景を描く作者の筆捌き見せるためにだけ設けられたわけではなかつた。前節で指摘したように、船頭千引はこの酒宴の果てた後、偶然姫君を垣間見て悪心を起す。

千引は御車にたちよりたるまぎれに、をりしもくまなく月さし入たれば、姫君をほの見奉りて、こゝろのうち、かゝるかたち人も世にはおはしけるよと、身にしむばかりおもひければ、たゞおもかげにたちそふこゝちして、ひとりいねもやられず、またも見まほしうのみおぼえて、もしかゝる人を得ましかば、いのちをもをしまじなどおもひつゞけたるは、なずらひならぬ身の程をもしらぬ、にくきこころなるや。

原話とは無関係に設けられた場面ではあつても、いかにも平安朝物語風な垣間見という趣向を用いて、この場面を緊密に物語の展開に組み込んでゆく作者春海の技量は、高

く評価されてしかるべきであろう。

さて、ここで作者春海の工夫として、補足的に指摘しておきたい点の一つある。それは物語中におけるある小道具の扱いについてである。大宰の帥として筑紫に下ることになった大井の三位は、北の方と姫君・若君をともなつて、右大臣のもとに赴任の挨拶におもむく。右大臣はさまざまな祝いの品をそれぞれに贈るが、大井の三位に贈られたものの中に「名高き帯」があった。原話にはこれに相当するものは出てこないが、これがこの場面だけのものであるならば、とりたてて問題にするには及ばない。しかし、この「名高き帯」は「つくし舟」の巻においても一度登場する。「つくし舟」の巻の巻末において、海賊の首領千引は姫君の首を絞めたのち、手下の海賊たちが取り残した宝を探す。その箇所に、次のような文章がある。

猶りのこしたる宝もあるとて、あなくり見れと、さらに物一つたになし。たゞ錦につゞめるもののみそ、ひつの底にのこしおけるか、見れば帯也。こはるゐたの宝とするもあなりとかいふ。もし、よの常の品ならずは、おもひかけぬあたひをこそうへけれと思ひて、ふところにおしくゝみて……

こうして千引は残された帯ひとつを懐に押し込んで逃亡

するのであるが、この帯は大井の三位が右大臣から贈られた「名高き帯」であつたはずである。このあと物語は、姿を偽つて暮らす千引を、艱難辛苦の末に姫君が見つけ出し、めでたく報仇を果たすというように展開してゆくのであるが、その中でこの帯は重要な役割を負つてもう一度登場させられる予定ではなかつただろうか。すなわち、物語の大団円において、姿を偽つて暮らす千引が仇であることを証明する証拠の品物としてである。春海はいわゆる稗史七法則にいう「襯染」のための小道具として、この「名高き帯」を使おうと考えていたように思われるのである。

六

以上、この物語の題名の問題から始まり、登場人物の造型、典拠の用い方、原話にない新たな場面の設定、さらには小道具の扱い方に至るまで、それぞれにいかにか作者である村田春海の緻密な工夫と周到な配慮があつたかを検討してきた。原話の白話小説を、単に平安朝の日本に舞台を移し替え、雅文体を用いて右から左へ翻案しただけというような作品でないことだけは証明できたかと思う。そして、現存する巻一「つくし舟」の段階で、これだけ物語全体の展開にかかわる周到緻密な用意がなされていたということ

は、春海としては少なくとも当初は原話全篇の翻案を考へていたに違いなく、試みに取りあえず冒頭部だけを一部翻案してみようなどと安易に考へていたわけではなかったのである。

再三述べてきたように、あるべき雅文体を模索していた当時の春海にとって、この作品はそれを実践的に試みる場でもあった。したがって、この作品の文体が小説の文体としてどの程度の成果を収めたかは、検討すべき大きな課題である。しかし、本稿はすでに制限枚数を大幅に超えてしまっている。具体例をあげてこと細かく検討してゆく余裕をなくしてしまった。以下、手短かに結論的なことだけを述べておきたい。

本稿における作品本文の引用からもある程度は窺えると思うが、春海の雅文体の特色は、何よりも流麗さと明晰さにあると言つてよい。往々にして国学者の文章にありがちな、術学的なだけであまり意味のない典拠の使用などはない。華やかではあるが無駄を省いた簡潔な春海の雅文体は、映像喚起力が強く、小説の文体として十分耐えうるものになつていふように思う。

もともと雅文体が、その古典的な伝統からして叙景や抒情（心情表現）に向いていることは改めて指摘するまでも

ないが、問題は同時に叙事や議論にも耐えうる雅文体というものはありうるのかということであった。叙景や抒情はもちろん、叙事や議論にも適う文体でなければ、近世小説の文体にはなり得ないからである。『贈三位物語』より一箇所だけ具体例を挙げておこう。海賊の首領千引が大井の三位を殺害し、姫君に迫る場面である。会話部分には括弧を付けて示すことにする。

帥の君なみだをうけて、姫君を見おこせ給ひて、「さきに父君の夢の御つげありしは、かゝる御さとしなりしを、まろさらにおもひもよらず。又あこがいさめにもしたがはずして、かくよこざまなる波風に、家のうちこぞりていのちをきはむること、皆わがおこたり也。またいつの世にか、もろともにさが野の花をば見ん」とて、いきづけ給へるさまいとみじ。千引はしりよりにて、「あな、やくなききりことよ。とくわたつみの宮にまうでよ」とて、おぼしまより引はなちて、くびいたくつかみて、沖のかたとほくなげやれば、波こほとなりて、御すがたはすなはち見えず。あはれ常の御ことぐさに、「来ん世にはむしに鳥にも」との給ひわたりしを、それにはあらで、今の世ながらみなそのいろくずとこそなり給ひにけれ。姫君はこのありさ

まを見給ひて、はしたなきめみさらんさきにとく死な
んとおほして、しひて御身をふりはなち給へは、御袖
ほころひて御手くつろきぬ。やかて御衣をすへしいて、
御袴のみにて身をなけ給はんとするを、千引はやくか
きいたきてとよめまゐらすれば、「むらいなり。手な
ふれそ。とくわれをころせ」とでない給ふ。

一篇中の山場ともいふべき所で、このすぐ後に姫君の陵
辱される場面が続くのであるが、春海の雅文体の叙事的な
表現力がよく現れている箇所である。雅文体であるからと
いつていたずらに曖昧朦朧とすることなく、かといつて過
度に卑俗さを露出することもなく、会話や心内語を交えつ
つ、的確に事の成り行きが叙述されている。「来ん世には
むしに鳥にも」というのは旅人の「讃酒歌十三首」中の歌
句であるが、それを引きつつ「それにはあらで、今の世な
がらみなそのいろくずとこそなり給ひにけれ」と大井の
三位の最後を描くところなど、事柄としては悲惨な出来事
を描きながら、一種滑稽感をさえ醸し出すような余裕のあ
る書きぶりになっているのは、「さるがうがましき跡なし
事（滑稽じみた虚構の作品）（村田たせ子跋）」としてこの
物語を書こうとした、春海の小説観の現れであるのかもし
れない。

曲亭馬琴は、春海や石川雅望などの雅文体小説を一括し
て、「おの／＼ふみつくる才は有ながら、いかにぞや、今
の草紙物語を、雅語正文もて綴りては、勞して功なく、且
雅語正文にては、情を写して、その趣を尽すことの得なし
がたきよしを悟らで、俱に綾足の余涎を舐りしは、千慮の
一失にやありけん。かへす／＼もえうなきすさみには有け
る」（『本朝水滸伝を読む并に批評』）と厳しく否定した。

また石崎又造も『近世日本に於ける支那俗語文学史』（昭和十五年刊）
において、原話にはなく新たに春海が設けた場面に對して
は、「春海が脚色したのは之等の数箇處であるが、大した
重要性を帯びたものではなく、単なる修飾的章句に過ぎな
いものである」と一言のもとに切て捨て、また一篇の山場
である惨劇の描写に關しても、原話の描写力については
「当時の数ある短篇小説中に於て、これ程真に迫る描写を
なしているものは稀に見る所であつて、確かに是の一節は名
文と稱するに憚らないものである」と高く評価するものの、
春海の描写力については一転して、「此れは文章の冗漫な
ことは兎も角として、千引の心理と動作が分離してゐる。
……随つて全体が締りがなくて不自然な結果になつてゐる。
春海の此の處の描写は完全に失敗であつた」と全否定とも
いえる手厳しい評価を下している。

これら二つの批評を代表として、『贈三位物語』に対する評価は、従来おおむね低かったといつてよい。しかし、未完の作ということにもよろうが、馬琴の評にしろ、石崎又造の評にしろ、『贈三位物語』をきちんと読み込んだ上で、の公正な批評とは到底思えない。これまで縷々述べてきたように、『贈三位物語』にはもう少し正当に評価されるべきところがあるのではないだろうか。それにしても、晩年の健康不良のため、『贈三位物語』を完結させるだけの気力と体力を春海が欠いたことは、作者のためにも作品のためにも、やはり惜しまれる事だったと言わねばならない。ちなみに、この作品には、国学者の筆による『つくし舟物語評』（東北大学附属図書館狩野文庫蔵）という批評が残されている。板本『竺志船物語旁註』をもとにした批評である。天保十三年（一八四二）に没した伴直方の書き入れが見られるので、成立はそれ以前ということになるが、複数に及ぶかとも思われる評者がだれかはよく分からない。これがかつて紹介した服部仁「国学者の「雅文小説」批評——『つくし舟物語評』について——」^{注1}も指摘するように、「文章表現や有職故実等に関する言及がほとんどで、構成等に関する評言は皆無」というものであって、小説の批評にはなっていない。本稿であえて言及しなかった所以である。

1 安西勝『小山田与清の探究 一』（一九九〇年八月刊、私家版）にもこう推測する。

2 「贈三位物語雑筆」（丸山季夫『国学者雑攷』所収、昭和五十七年九月刊）に翻刻を収める。

3 注1に同じ。

4 拙稿「江戸派の成立——新古典主義歌論の位相——」
「和文体の模索——和漢と雅俗の間で——」（『江戸詩歌論』所収、一九九八年二月刊）などにおいて論じたことがある。

5 馬琴以後、この作品の原話に関しては、石崎又造『近世日本に於ける支那俗語文学史』（昭和十五年刊）や麻生磯次『江戸文学と支那文学』（昭和二十一年刊）など、諸家いずれも同様の見解を示している。

6 安藤菊二「村田春海の旧蔵書」（『典籍』第十五号、昭和三十年二月）および森銃三他編『近世文芸家資料総覧』（昭和四十八年刊）によれば、村田春海の遺稿と旧蔵書類は、春海没後、養女たせ子に受け継がれた後、たせ子の生家渡辺家にわたり、その後渡辺家の親族中山昌のものとなったが、弘文荘を経て一括して昭

和三十四年に天理図書館に春海文庫として入ったものと思われる。弘文荘から天理図書館に入ることになった時、森銑三氏が作成した仮目録が天理図書館に現存するが、それによれば春海文庫の内訳は次の通りである。

- 一 春海稿本之部 六十四部、 七十四冊
 - 二 春海自筆書写本之部 二十七部、 二十七冊
 - 三 春海自筆袖珍本及関係本之部 十六部、 十六冊
 - 四 春海自筆書入本之部 十四部、 五十九冊
 - 五 春海旧蔵本之部 百八十七部、 四百三十九冊
 - 六 也足軒自筆本之部 三部、 三冊
 - 七 多勢子自筆本及関係本之部 十六部、 四十冊
 - 八 加茂真淵旧蔵及関係本之部 十四部、 十九冊
 - 九 書画幅之部 十七本
- 7 『織錦詩稿』所収。この詩については拙稿「漢詩人としての村田春海」(『江戸詩歌論』所収)を参照されたい。
- 8 春海の妻おすがについては拙稿「村田春海と丁字屋

丁山」(『江戸詩歌論』所収)を参照されたい。

9 春海晩年の文化年間に成立したと推定され、文化五年に『類題怜野集』「附録」として刊行された。

10 天理図書館春海文庫蔵の自筆稿本一冊。

11 天保四年一月十二日成立。丸山季夫編『本朝水滸伝後編・由良物語』(昭和三十四年三月刊)に翻刻を収める。

12 『同朋国文』第十九号(昭和六十一年刊)。